中村俊定文庫
文庫 18
257
2

俳諧孫ふの墨巻

宮梅

一 拍子なりし墨さやけさの秋　沾澄

茨芽

錦まさ紙さす菊の墨さ　麦阿

烏年

契ひとも形肺の眉ハ銀漢　梅郊

八日とく拵いやらしあまの川　沾瀾

龍や朽ひ河法のき橋　桓　如簧

中村俊定文庫

星条舟にまき色の松明に　芦江
辰三星沒松初長
七夕にめてやもきれのもしめ　祇明
雪
六日さうかと鐘を鉛筆　沾山
曉
星しきもゆるさぬ難のこゝろ　仝

和光高掛
照　高ゟ衢

関の松に田雲もまたわる灯籠　沾山
急行に桜ふ万仲の秋　沾澗
最出る月の荒寄の重寂く　樗山
蔡ぬき蓋ス関乃人々　魚山
むしろ田の石に鶴て二ッ三ッ　沾澗
土に花を洗ふ池手　沾山
ら
国に君と和生をすてき香神　魚山
被の内に龍ひつし　樗山

ウ

孫はもしやせ子なり愛をとく　沾蘭
母人のうの如く今若　沾山
豆腐ふ茶花の寺にまれる　橋山
破板戸の雨ぬりらく　魚山
牢人ぬ隣つくへ茶毛蓮と　沾山
米ぬまけ蒲鉾のうへ　沾蘭
鶏車をの大仮ぬの蓮の　魚山
しつや家の限なき　海　橋山

羅太平

國雨のことのれかき　躍りか　甲子　胴捨
躍りか母子雀の躁く　まさく　徐沾　茅利

初秋

桐のもやかへく落る　松の青　沾鱗

入塘

涼さふ落しこそ　雨かか　蓮千

鏡樋

稲妻も目つけ沼ぬ田面　沾徳
いなつまやこそらも　鶴の雨　花簾

猶書

いふ書や見生ひたる橋の人　沽長
いなつまやんの俗の園の中　蓑羽
始つ海や井る碑の殘の波　玉雪
玉盤
きつゝめや玉　梅しろ　松妹　沽山
時中
宅まゝ出事まゝや始のも　爲邦
秋の間に何や雀の後一つ　作者不詳

下や

中郷花

しら雀高や始末の山の門　沽山
地詠にくゝ人夕虹の色　如簧
車井の吉野月の丁とまて　林思
まるかし青の蓋不まて　果量
松の逢横へくと匠くい　魚子
あくらかき作舟を漕之　桃軍
ウ
墨衣細平杭へ俗事なく　如簧
めいよ度子の後かふくれて　沽山

蟷螂は棒振よりも強けれ　宗似

稲妻は松の働そひらかす　法永

古寺や人すさませぬ虫の声　山磯

むしのや草を起てもしら露　梅呂

日ぐらしの声を流すや雨上り　幸兆

世の中を渡て秋の故蝶哉　釈 瀾月

枕からそれと夜や草の虫な尓　法信

降こめて明けり秋の蝉　三湖

蛬と耳をそやしの声　樸旭

蝉や草くらう露の下　法耕

附ハ古戦場を弔の文をよみて

戦ひの昔を鳴や虫の声　法心

鳴くや岩力のきりぎりす　之浦 澤酒

虫の音も秋男子更ル響哉　白 菊泉

五高

八幡や蔦もあらぬ荒葛　女 波琴

題一字

初雁や芦ふ田へ只一文字　法徳

初雁をやさそひて渡雁　白至

初雁や廿ヶ過る月の友　樗山

すゝ丁や毒子餅れ海の色　沽貝
仲訓し居の初言や娘役者　吟國

十分

詠ゝ花や馬さ人庭の松まの目　萬山

手と曳ハ岡のすゝ庭のうゝ足　沽徳
しさしの月の入さの尾むふき　雪雨
名ゝや上ゝ目のすゝひきゝ　圃目
蛤の口ゝ仔ゝ凡ゝの月　玉菴
名月や凄きハ橋のうゝ年　沽他

名月や酸ゝ菜も香値ひ　松山
婿や出ゝ宇や婿も月ゝ旨　顧瞳
出ゝ月荷猿の和ゝ詞なし　砂丹
名ゝや蓋すゝきゝ物ゝの面　午川

松鶴の旅庫ゝ折ゝ中秋ゝて
松茶活て月まゝ鶴のうゝ孫　重英
　　羽州酒田

明　梅

雪明や二斗ゝ雄の指ゝり　沽徳

田畫堂中力
史聽出の形

[illegible]書の月[illegible]や衣掛　沽山
我くろ髪も[illegible]の枕　巴船
もみち葉の山出かけりて　橋山
[illegible]も[illegible]横ふつ岸　山山
[illegible]難も[illegible]の寅こ　巴船
[illegible]とれる日の[illegible]い世中　橋山
ウ 酒ハゆる寸[illegible]の[illegible]も[illegible]て　山山
[illegible]酒へうつ史の[illegible]　巴船

傾城の[illegible]殊数を持　橋山
うとくくん[illegible]やすらん　山山
生涯の[illegible]の[illegible]　巴船
[illegible]　橋山
[illegible]　山山
七里[illegible]の一里[illegible]　巴船
[illegible]　橋山
こゝろの上[illegible]　山山
[illegible]　巴船
[illegible]　橋山

十

秋立に鯛いどうだも離さんなり　山山
一万歩と口でこそいへ　巴船
本願寺様も半元かぎ　橋山
お前りとは再よさいけれ　山山
夕月に布子着せんとすると鶴　巴船
稲荷の主ス　義の如く他　橋山
様の世を世にすてたむ御当　山山
ゆさやうなり　寝の爪者　巴船
うらかけてちゃんと出て兵糸の町　橋山
明りの首にまぎ咲ぬ　菓　山山

り

むらのまでいとく霞に霞　巴船
船もろともに霞ル　山川　橋山
日やくと児伴ふくは師達　山山
金里くさきくの形す　巴船
小金むりは万も磯物を　橋山
あらんなの真和強つき　山山
まい日とあらしいやすれ　巴船
ゆしさいけれ菓種咲者　橋山

鵬程

けしきの如分貴し　蘊秩山　鋤韓

、

蓋てとり叩ける葉の如くに　土浦　翠光

鉛字

田葉して叩は長な麻の於　文編

若くさうに麻のくいなりもんに　紀逸

まゝ落くと唐姫の麻の枳間に　霞坊

角のまゝ物とも見て麻の於　作者霖

長さと麻に叩ける山ほ分　紫明

思婦

杉の葉へさそふや小枳　砧　錦城

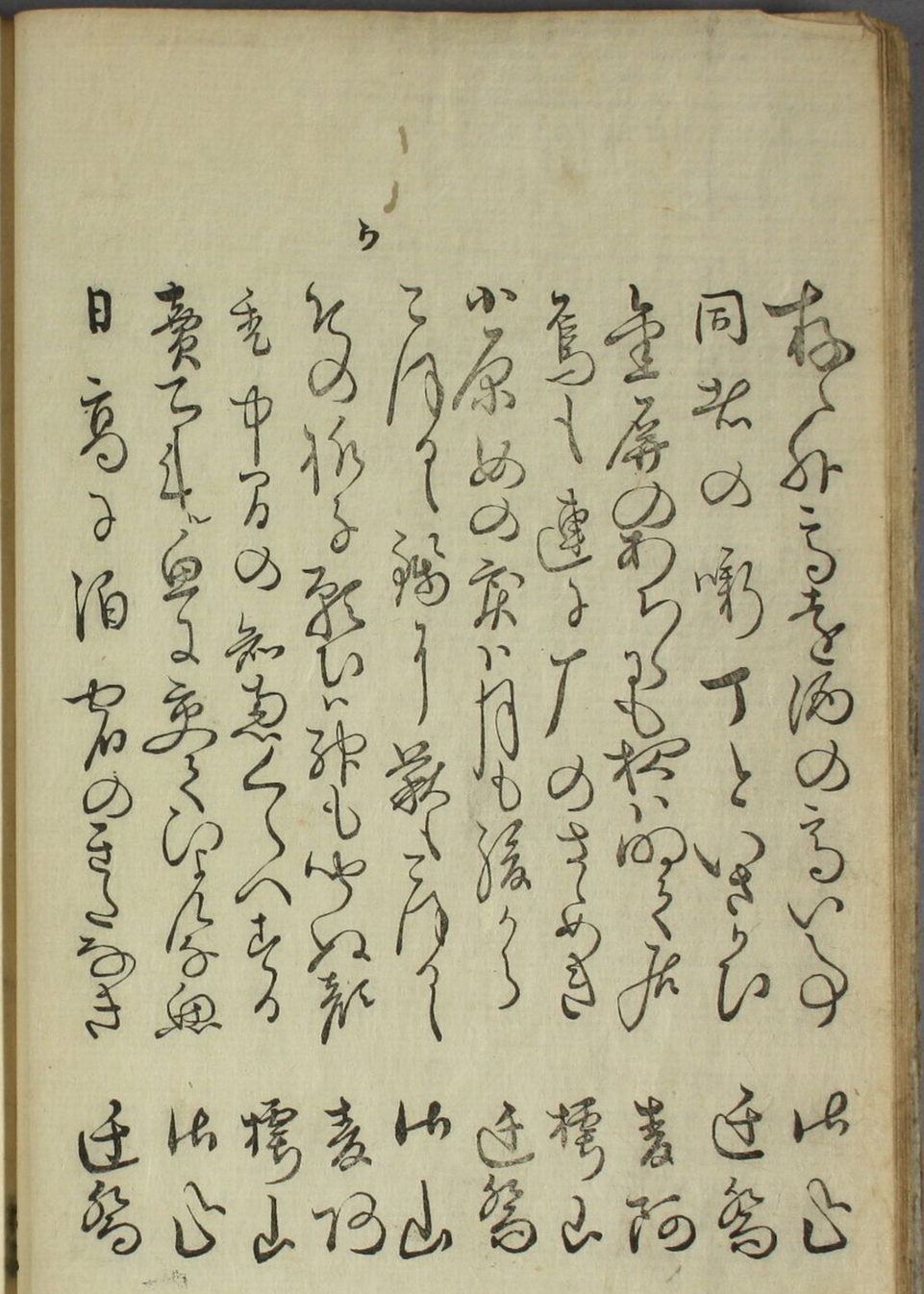
唯の体ある所をきめるに　自志

麻々の種種なくの砧分　沽山

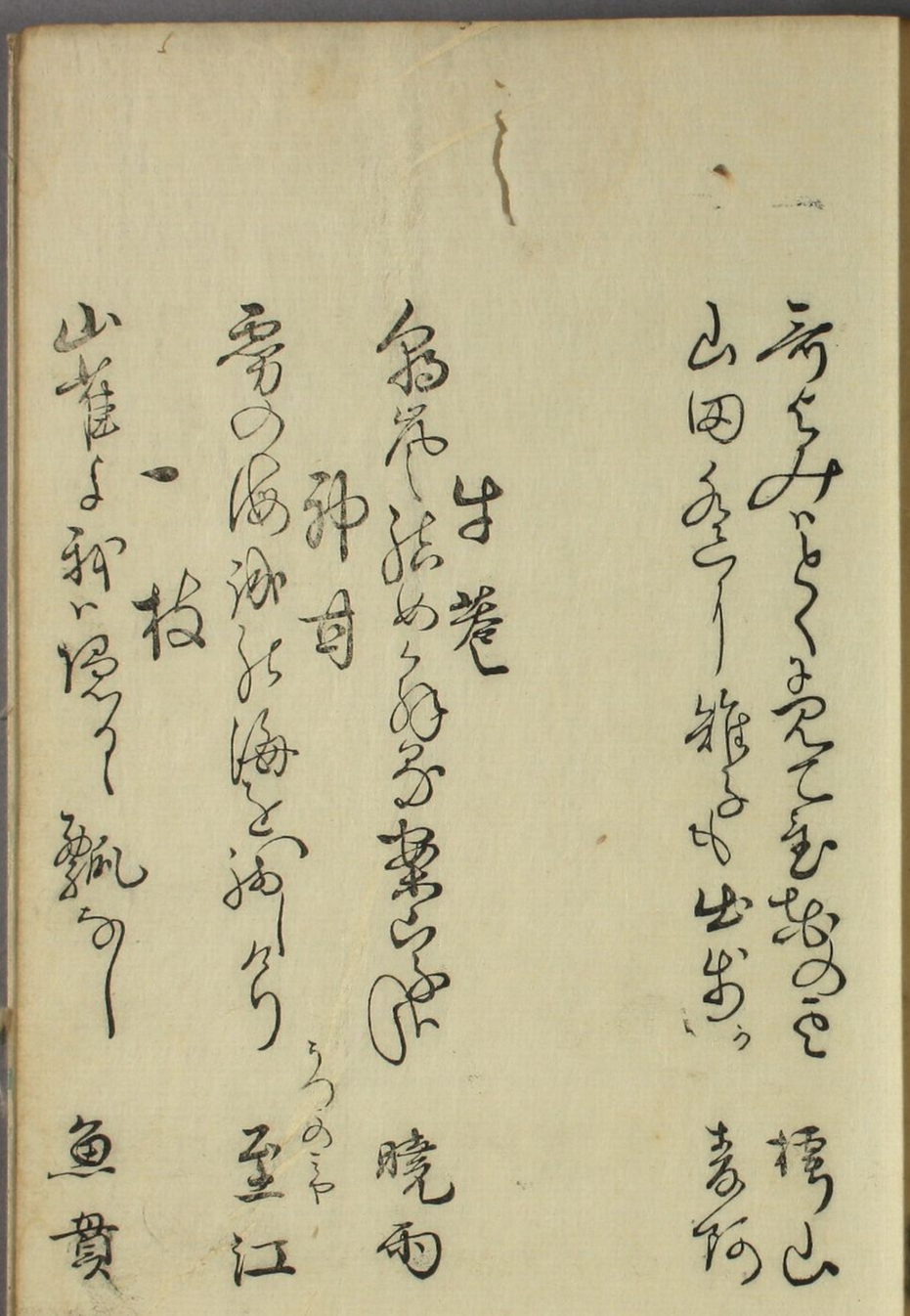
新しく見る如の自　遷鶯

角力丸の名を只の名呼々て　麦阿

買人ほしやとそふ一緒　橋山



ゆくかうを海のうらいなり　山上
同若の嘲丁とつきかひ　迂鶴
重屏のわらるも松ハ向く花　麦阿
鳥も連よ丁のさめき　樗山
小原めの寒ハ月も後から　迂鶴
二月に鶴り歌こけし　山山
その祇子歌ハ神も此ぬ都　麦阿
香中万の知恵くらへ　樗山
賣ちれ魚よ寒くひ子魚　山上
日高よ泊若のきこなき　迂鶴



所をみいとくよ見て金おのを　樗山
山田をつり雅子も出来ゆ　麦阿

牛巻
鶴花結めゆ子楽にゆ　曉雨
神甘
雪の海渉れ海とゆしかり　至江（うつのこや）
一枝
山雀よ和ハ隠りし飄なし　魚貫

とても入口はせりなき詞は　圓高

先のとしもこの頃温泉へ
まりあるべきみく

鶴鏡のかそへて花や石の上　沾山
舟の木夜を洗ふ初河　玉笥
待月の虹は天津の旬みて　梅笑
探花具かつきぬなり　翠羽

岡崎も都かたぬき新田殿　素花
今の浮世雪も雪はかくれば　圃月
起くとしなき志くし　礼数　翠羽
又ちめ入をさせる　相談　梅笑
中原やきぶき雅藻を建なる　沾山
土圭損して京便絹　玉笥
此寺の三年結なるもの花　梅笑
四辻殿結四志くへの書　素花
知れて計明番今系　玉笥
貧な咄も梅月の絹　翠羽

おのおのいるよう
名にもとづくのみ
業因もめぐるこの
十 松へ
ちそも踏まえ
母のこ業も
海もうつるさま
松のたく宮
二日よ余ら雛の

恋姓の的 場所なき恋 圃目
四 月よくとき 滝の白糸 孝慶

五 英

酒なるは虫は酸へしきくの酔 長鶴
筆吟て麻酒の歌は極りぬ 要士
ハ重きくもけつきとハ辛ハなかり 沾司

或人の唐宮めく

老る筆や黄て指の老よきむ 祇雪

まつまりと明 離るる黄筆に 土浦 沾澤

塚 枝

古寺や祈きめる栗の落る音 存義
とのゝ鳥の舎うけてや梅姫 冬水
浪柳の雪に跡ねく鳥に 瑞多

碎 鍋

和尚葉や儀なるの子時雨 沾帝
、
鳥といふ鶴も拘ぬもみる分 沾柳
きぬくの酸と和尚の松明に 夜参

功の系いる庸にそあれ秋の系　沾幹
爪和の落ちて悟しもみち　鶴　露載
旭とり夕日に来もみち　鍋　愛

蕉鍋

俳しさを同じ知れば秋の面　鶯溪
そこなる物を拾し秋の面　貞山
松所や同じまちも秋の風　席上
旭さ秋と思へいあわれし　迂鶯
いろくや松の色は秋にそ　宇倫
芳松のいよく芳し龜の山　沾山

洛輪

芳島も来ありて後の月　雪圭
雪さの家も知れし十三松　出翠
志ちも又闇へは去りし十三夜　巴船
十三松子島の初春夏にかわ　渭北
志ふ柳も深に止り十三松　緝菜

安里

志ふ空し池の塢へも比叡お待し　可圭
ふとん着て袖もと芳ふ松空　田社

中郎技藝

冬部

礫雪

木枯の路を積めて時雨ふ　沾瀾
汀海の伴豆いかくなし時雨ふ　為邦
白雨ふちりくさし丸乳ふ　圃目
とちくへし一枝をとて時雨ふ　五井

、

岩まゆへ蛋の肌火の時雨ふ　局菴
青もさぬ松の方く時雨ふ　加海
枝り古雞のしとさや夕時雨　半霞
松うつて古いなりも時雨ふ　迁鶯
ちる霧時雨山ハ包々わ　沾山
一日のすけて短きしみれ那　字惠
大虚を隔ふ地やほしくれ　文鱗
隨つきの片肘ぬて寸時雨ふ那　甲子　英瑞

十

喜の枕の短いのこゝ愛も又　素龍
そうやうし衣　山文のうひ　猿雪
篳篥の聲古き座中　痛入　翠羽
いつも美し　伊吉の演　此山
翠松は猿師ハ先つ和と玉紙汗　玉香
飲もこゝろて　者　喰ひ法　素龍
くせ紙も馬をまん傳と呼ひ　翠羽
五十よ加さふ　家とうんな　玉香
貧を好もうこしへ　いまなす　此山
素ハ牛の　衣　裁すわ　翠羽

ウ

月も又素と揚屋の　蒼　和　素龍
くさきとくる　鰐　乗へ　猿雪
見ハ掛もみちゝ下の　舊　郎巾　翠羽
ひ　舞ゝ　鶯ちゝも　鞠ゝ　笠ハ　此山
姫　姫　丸　をき　東へ　青ゝ　体て　猿雪
拳へ　載　ちゝ　海丹の　習ひ　素龍
白鷺の　姿も　せ　ゝ　ゝ　道　玉香
蝶ゝ　更ゝ　蜂の　君　常　圃目

青め

鍾如そみたれ雛芝橋の栗　鋤鱗
嵩蔵の撥撥に栗ハ落ひ和ね　舒嘯

、

たつ栗や鰹に明しう葵の上　沾國
抱痳す肩に宮に栗松ひ　和武
初栗や不かしなる借足袋　太嶽
松まし呂路石の栗霞の　沾山父　太秦
今て松ハ梳明かれ栗　来丸
とく栗や烟れ斗馬の息　甲斐　羽稔

望柯

望鶴の言とさ望き葵をふ　千玉

、

名も知ぬ木にも同く葵をふ　沾浣
みの山に名ひけるき葵をふ　如竜
桔の暖に痳るかしらん　梳牛
やまひこの一きハをき葵をふ　沾卵
葵をして青ハ鏡の以ろ斗　玉筍
鏡つきの松明なき葵をふ　也楷
別し世の楷を拝しからん那　巴船

嫡乗ハ侍らずしめて柄ニ合わ　業星
糸の勢古は物ハいまだ　魚子
袖の香ニ覗ク化粧の素さ化　此山
呼てかしき小菓の君　業星
花瓶も表紙ハ喫えれ　魚子
さくらかきなき百姓の庭　此山
芋鹿ニ蓋師も見えた縄自　業星
酒さへ老て今いこゝ四ツ　魚子
明ゆの為けしのむ首ふりまて　、
鍋蓋老ル碓井の手　業星

鍋杖も実ハ留て縄ニさし　此山
龍ゆきかゝ姫の恬ミ　魚子
追くニ桔を無て　業星
傳墓所へ掛くの先ハ　此山
大雪を降せ以ハ玄冥お　魚子
色ハ縄ハ椒の他や切るん　業星
清ハ見て如めハ臆をたとえん　此山
神の厩も同し小くさ　魚子
蟬ハ老ハ不河て鮎の月　業星
半ハ雲ニ古市の霞　此山

ウ あさ風に柏のちりの秋暮て　竹山
池の蓮ハ子ハあらけ　筆呂
今とりて戻の世さハ君くれわ　魚子
竹の葉ハ白いかハいなそ香し　竹心
蓑むこ路の吹くハ志くし上ミ　筆呂
ちつ居とりも行かれの居　魚子

十
十探　交地
七里りえ海ハ海苔の花　湖十

夏ハ子ぢ海女の閑や十探　句艶
目のさめ行葉子咲て十枚かな　沾文
蝶一つ日御そ返や十夜花　袋井 沾猗
園 懐
末幾りて尿くやお猪も居子衆　沾徳
聖 寛
木枯の緑ハ松とちからかな　器洞
こうしや木々ハ裸子松の色　一女 葉子
風や一筋にし滝のまゝ　土浦 渓漢

枯樗 芳薗 芳薗 芳薗

枯樗 芳薗 芳薗

芳薗 芳薗

枯樗

芳薗

三部の力費る雙原の
都しの名の樋の口　沾山
唐の松の淺き宮の高く　秋雲
とゝの遠ゝまは高の有り　秋明
夏の月とや酒も悪くき　沾山
茶煮して眠けれく　秋雲
　秋明

ウ

相の茶の淺きくを一の花　沾山
誓請おろす寺の山の夏　秋雲
おほうさの雲の松樹で　秋明

例の俳諧の時をうつし
いさ　松雲　山
行う

茶学
秋柏や閑な俳諧　沾絮

雁まていらぬ世の芋掘　桂祥

涼しさは中く千仲の子をそ　北山

公家衆のふきとてもまし　橘山

かいらぬのとり庄よりより　魚貴

悲しうし鏡のぞく人の上　玉井

とりし火とふ時は油火　巴水

盃と杯を皆お藁稲荷山　魚貴

木目もかくての折枝　五井

驚も風の色も啼つらく　北山

積彼岸の日中秋月　橘山

杖とふ助もかまぬを植　巴水

人将に寒くゐて硯箱　桂祥

宗鑑は法師の心附ひらり　橘山

京さも筆をやかしやと　魚貴

来ハくも名所かゝる渡し舟　玉井

ふり出てせくと其の酒気　北山

こりくの人をまてゐ歌の面　桂祥

仏の綱をいま母親　巴水

冬の世に月の光に撫もかし　魚貴

足并べて秋に実の道る来　橘山

鳥もとの如き
名もとや飛くに咲 陶 蕪 文編
羽佛に日にてらくと陶も 沾翰

凌 霜
山菜花や猿と相うさ菜の唐 巨桐
山菜花や葉に蛇の形 魚子
山菜花ハ蔵を知ふけるの 白主

清 露
菜の花乃うすくに菜に咲なり 紀逸
岸 侶

子鳥鳴 蜃に蜃居や吹さし 素花
芦の家も住もあれに衛 柏里
淵 書 此菱な破りそさに衛 祥明
川ゆに妙蔵花よとや夕ちとう 魚山
泉岳寺ゆの月ハ千鳥り那 序山
さしゆに政志さりけり衛り如 杜若
明るも闇のまはそ明ちとう 洒夕

外 蕾
名鳥に菫の香に山おろし 光蕭
水鳥や菱も名の田の星ハ上 精安

[illegible]
小家まりしに暇を明るり　沾山
馬の背買へと[illegible]　沾池
中して[illegible]　馬光
[illegible]の月[illegible]　宗倫
[illegible]やうしたる[illegible]　緝茶
[illegible]のまろめ　沾山

ウ
[illegible]の[illegible]　沾池
[illegible]　馬光
[illegible]　宗倫
[illegible]　緝茶
[illegible]　沾山
[illegible]　沾池
[illegible]　馬光
[illegible]　宗倫
[illegible]　緝茶
角ツノと掃出ス[illegible]の扉口　沾山

論文

埋火や茅子行する小ん鍋　百隣
うつこひや己ヵ鼻の図両　樗山
字はこゝ出る人ハ浪を長々り　作楽示詳

穿籬

蒼々は青へ道ヵ冬至梅　沽柳
雲梅や一輪二輪吉いこす　梅川
寒梅しまて何れハ雀と　猿多

百ともはしハ死し冬の梅　霞園
嗜えても人ハ我カやふ也ぬ　至江
雲梅や薪切出ス　ち隣　沽山

理理

冬鶯や何宜上く水鶏　朱布

三滅

此はとなく苞うら冬よ成ハ　沽務
此松や冬を選て此の妻　秋　潤月
とし出せはさゝ第可冬の川　洹光
小坊主とまひこの花や冬花　海菱